


 双生児研究会ニュースレター
 《第3号》
 Newsletter of the
 Japan Society for Twin Studies
 1988年 6月15日 発行




目次

ふたごの不思議な体験 (井上 英二) ...2
 双胎妊娠におけるVanishing twin (吉田 啓治) ...3
 東大付属学校と双生児研究 (永井 好弘) ... 7
 双生児研究会第2回總會議事録10
 幹事會議事録11
 【書評】「ふたごの世界－双生児の25年間の追跡研究－」(詫摩 武俊) ..12
 文学作品に登場するふたご(ふたご研究の周辺 No.3) (山田 一朗) ...13
 第6回国際ふたご研究会議のご案内14
 第3回學術講演会 開催と演題募集のお知らせ
 ※ 昭和64年1月14日(土)午後 1:00-5:00
 ※ 於：東京医科大学病院・第1研究教育棟・3階：第1講堂(予定) ..15
 ふたごの建物 No.2.....16
 編集後記.....16

ふたごの不思議な体験

会長 井上 英二

ニューズウィーク日本版の1987年12月3日号に、Donald M. Keith の不思議な体験の話が出ている。

この人は一卵性のふたごで、相手の Louis G. Keith とともにふたご財団(The Twin Foundation)というアメリカの団体の役員をやっている人である。国際ふたご協会の有力メンバーの一人で、アメリカの軍人として日本に駐留していたこともある。

ニューズウィークの記事によると、ある時 Donald は脚のつけ根にひどい痛みがおこり、このことを友人に話したところ、ふたごは離れていても同じような経験をするところがあると聞かされたらしい。そこで、Louis に電話をかけてみると、彼も股関節の筋肉を痛めているということだったので背筋が寒くなったという話である。

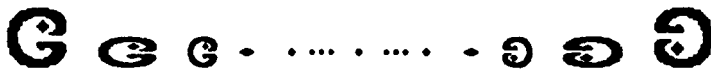
ドイツの O. F. von Verschuer はふたご研究の開拓者の一人で、大戦前に Berlin-Dahlem にあった人類遺伝研究所で超大なふたごの調査をやった人である。戦後この資料に

含まれているふたごのその後の生活史の調査をして”人生における効果要因 Wirksame Faktoren im Leben des Menschen” という単行本にまとめた。その中に同じような戦傷のために戦死したふたごの例が出ている。一人は戦傷で一方の下肢を切断し、相手はその3年後手榴弾の爆発で一方の下肢を失ったというのである。

このような不思議な一致はもちろん下肢に限らない。一卵性ふたごの二人が同じ病気に相次いで罹ることはしばしば経験することであるし、1年の間隔で顔面のほとんど同一の位置に外傷を受け、ほとんど同一の瘢痕を残した一卵性のふたごの例をわれわれも経験している。

一卵性のふたごは形態的に似ているだけでなく、刺激が違っても神経系の反応のパターンが特に似ているのであろう。ふたごは人間を理解するための無限の材料を提供してくれるというのが私の実感である。

(1988.4)



双胎妊娠における Vanishing twin

吉田 啓治 (東京医大・産婦人科)

近年、妊娠の診断に超音波診断法が多用されるようになり多胎の早期発見が容易になってきた。そのため、出生する双胎に対して妊娠初期の双胎の頻度がはるかに高いことが注目されている。すなわち、双胎妊娠で一児のみが妊娠経過中に流産し消失するため、単胎の出産として取り扱われている症例も少なくないと考えられる。双胎妊娠では、初期に限らずいろいろな時期に一児が死亡することがある。体内死亡が妊娠末期、中期に起こった場合にはそれぞれ浸軟児、紙状児などとして娩出され明らかな証拠が得られるが、妊娠初期に死亡した場合には出産後にこれを証明することは必ずしも容易でない。Landyら(1982)は、文献や文通により双胎の消失頻度を調査したところ0~78%ときわめて広い範囲に分布していたという。このことは、調査対象人口、調査の方法、超音波断層法手技等の問題、分娩後の胎児付属物(卵膜、胎盤等)の検査法、その他多くの因子が関与するものと考えられる。

そこで、自験例 178組の双胎妊娠における末期、中期、初期それぞれの一児の胎内死亡症例について検討し、文献的考察をも加えて消失する双胎 vanishing twinの頻度について解説する。

I. 胎内死亡の時期別の検討

1. 妊娠末期の双胎一児死亡

双胎妊娠で一児の胎内死亡が妊娠末期に起きると、生存児に血栓をはじめとするいろいろな障害が起きる。とくに一絨毛膜性双胎では、胎盤で両児間に血行吻合が存在することが多いため、脳血栓あるいは栓塞により高度の脳障害や腎血栓による障害などが起こることがある。これは死亡児からのトロンボプラスチン様物質が吻合血管を経て生存児に流入するためと考えられるが、必ずしもすべての症例にみられるわけではなく、その詳細については不明である。一児の胎内死亡後短時間内に分娩に至った症例では、生存児に対する影響は少なく、時間の経過とともに生存児の障害が強くなるようである。著者の経験からは、胎盤内血行吻合が動脈-動脈と静脈-静脈の同時吻合を有する症例の予後がもっとも悪く、また、吻合血管の大きさ等にも影響されるものようである。さらに、胎児死亡による児の縮少、羊水の減少による子宮筋緊張の不均衡を生じ、胎盤の部分剝離が起こり早産の傾向を示すようである。その他、感染、胎内死亡症候群による合併症の発症なども考えられる。自験例の末期一児死亡10例はいずれも死亡児は浸軟児として娩出され、無心体など高度の奇形を伴ったものもあった。生存

児中2例に高度の脳障害が認められている。

2. 妊娠中期の双胎一児死亡

双胎妊娠で中期に一児が死亡した場合、多くは生存児には何ら影響がなく、満期まで妊娠は継続し、死亡児は紙状児として胎盤とともに娩出される。したがって、ときに卵膜に含まれた紙状児が見落とされ単胎として取り扱われていた症例もある。また、紙状児の中に無心体やシモナルト羊膜索を伴った奇形児が見いだされることがある。紙状児を伴った双胎分娩の自験例7組中、2例の無心体紙状児があった。妊娠中期の双胎一児死亡では、生存児に対する影響は少なく、ほぼ満期分娩となると考えられているが、生存児の1例に腰部皮膚の広範な欠損が認められた。これも死亡児からの影響による血栓形成があり、その配下に循環障害をおこし先天性皮膚欠損症となったと考えられる。妊娠中期における一児死亡は分娩までの経過が長く、胎盤内に存在したと思われる血行吻合の確認は不可能なことが多いが、2例において動-動脈、静-静脈の同時吻合と動-動脈、動-静脈シャントの同時吻合を確認できた症例などから、恐らくすべての症例で胎盤内血行吻合が存在したものと推定され、妊娠の比較的早い時期に発症した双胎間輸血症候群により高度の発育差が現れ、発育遅延児はついに死亡し、ミイラ化したものと考えられる。この紙状児を伴った双胎は、娩出胎盤を注意深く観察することにより発見

できる。

3. 妊娠初期の双胎一児死亡

娩出胎盤を検索しているとその胎児面に、絨毛膜嚢胞より大きく、内容液が茶褐色不透明で粘稠度の低い嚢胞を見出すことがある。その中には、無構造壊死組織や索状物が付着浮遊している。このような組織は妊娠初期に双胎の一児が死亡し、変性萎縮して残存し、縮小した羊膜腔とともに見出されたものと考えられる。しかも、その嚢胞底部には著明な線維素の沈着が認められる。壊死組織は高度の変性のためにこれを胎児組織として確認できないことが多く、双胎の一児とするには多少疑問も残るが、絨毛膜嚢胞とは明かに違っており、早期胎内死亡を起した双胎の一児と考えるのが妥当のようである。これらの嚢胞形成型の双胎例9組はまだ超音波断層法を使用する以前の症例であるため、妊娠何週頃に一児が死亡したもののかの判定は困難であった。

II. Vanishing twinの証明

妊娠初期の定期検診にて超音波診断を行い2個の胎嚢を発見したり、性器出血等の切迫流産の診断に超音波を用いて2個の胎嚢を見出すことがある。その際、胎児心拍が2個確認できる場合と、心拍は1個のみにしか認められない場合がある。しかし、2個の心拍も妊娠の比較的早期(妊娠7-9週)に一方の心拍が停

止し1個のみとなるものもある。このような双胎における一児の胎内死亡は、早期に起こればおこる程他児への影響は少なく、また、消失した児の証明は困難になってくる。

最近経験した二症例を次に示す。

症例1：26歳未産婦、妊娠7週のと
き性器出血を主診に来院したためB
スコープ施行し、2個の胎嚢とその
中にそれぞれ明かな児心拍がみえた。
しかし、入院加療中の妊娠8週では
すでに一方の胎嚢中の児心拍は消失
した。その後切迫流産症状は消失し、
妊娠11週では心拍の消失した胎嚢
は変形萎縮が著明となり、やがてそ
の胎嚢はBスコープに描写されなくな
った。この妊婦は妊娠41週にて
3,532gの男児を正常分娩した。胎盤
は一見単胎胎盤のようで卵膜の異常
に肥厚した部分があり、その表面に
は血行の杜絶した血管の走行が認め
られた。その部の組織検査により2
層の卵膜にとり囲まれた外胚葉由来
の組織がみられ胎児の遺残と考えら
れた。

症例2：37歳2回経産婦、外来の妊
娠定期検診にて妊娠7週時、偶然2
個の胎嚢とそれぞれに胎児心拍が見
出された。妊娠経過は順調で、妊娠
41週にて4,090g男児を正常分娩した。

胎盤は臍帯の卵膜付着以外はとくに
異常を認めなかったが、卵膜の一部
に脱落膜壊死様の肥厚が認められ
た。その部の組織検査でも異常に肥
厚した壊死組織と認めるのみで、こ
れを死亡した胎児組織由来かどうか

の確認は困難であった。しかし、通
常の脱落膜壊死とは形、拡がりとも
明かに異なっている。

以上の2症例から判るように妊娠
初期に明かな2個の胎嚢、胎児心拍
を確認できてもそのうちの1個が消
失した場合に、胎児娩出後は消失し
た児としての証拠を全くとらえられ
ない症例がある。とくに娩出胎盤の
精査が行われなかった場合にはさら
に多くのvanishing twinを見逃して
いるものと考えられる。しかし一方、
妊娠初期の超音波診断に際しては、
音響学的artifactや脱落膜出血、あ
るいは妊娠早期の胚外体腔（絨毛膜
腔）などを第2の胎嚢と見誤ってい
る場合もある。

Ⅲ. 双胎妊娠頻度の推定

Landyら(1986)は、妊娠初期1,000
例にBスコープを施行し、54組の多
胎妊娠の診断を下し、そのうち双胎
は50組であった。これらは29例の2
個の胎嚢児心拍を認めたもの、18例
の2個の胎嚢中1個に心拍、1個に
は心拍のない胎児あるいは胎嚢のみ
のもの、および3例の二葉に分かれ
た胎嚢で1個の心拍しかみえないも
のの3群から成る。そして、29例の
2個の心拍を認めた群からは20組が
双胎分娩、7例が単胎分娩であった。
18例の1個の心拍群からも3組の双
胎分娩があり、10例が単胎分娩で、
他は流産であった。3例の分葉胎嚢
群はすべて単胎分娩であった。した
がって、これの3群の双胎消失頻度

はそれぞれ、24%、55.5%、および100%である。一方、明かな証拠の得られた妊娠初期の多胎妊娠は3.29%、疑わしい証拠のものも含めると多胎妊娠は5.39%の頻度となる。

また、Leviら(Landyら,1982から引用)は妊娠初期に3,161例にBスコープを施行し、妊娠4-9週で32例の多胎妊娠を認めたが、実際が多胎分娩は僅か6組のみ、妊娠10-14週での多胎の診断は22例で、多胎分娩は14組、妊娠14週以降は89組の多胎の診断で全例が多胎を出産した。すなわち、多胎消失頻度は、それぞれ81.3%、36.4%、および0%となる。これに対し、多胎妊娠の頻度は確かな診断根拠のあるものは4.21%、疑わしいものも含めると5.03%となる。

著者は10,763例の娩出胎盤を精査し、この中には10組の品胎と178組の双胎が含まれていた。したがって、双胎の頻度は1.65%、すなわち約60分鏡に1例の割合と非常に高頻度であるが、これは病院の性質上、異常妊娠の診断で転送された妊婦の中に多くの多胎妊娠が含まれていたことにもよる。178組の双胎胎盤検索において、明かな証拠の得られた胎内一児死亡例は34例(19.1%)であるが、これを一絨毛膜性双胎に限ってみると110組中27例で24.5%と高率になる。この中で早期に一児が死亡した blighted ovum 型の胎盤胎児面に嚢胞としてみとめられる胎盤や、卵膜にわずかに証拠を残した胎盤等はとくに注意深く観察しなければ見落としてしまう可能性が高い。

本研究会の中村ら(1987)も妊娠初

期の調査で双胎消失頻度は25%、一方、確認の得られた双胎頻度は1.9%、疑わしいものも入れると4.2%であったと報告している。

以上の報告等から、調査対象妊婦の数や、超音波診断の間隔など幾多の問題はあるが、妊娠初期における双胎の頻度を推定すると、日本人においては、確認を得られるものが1.6-1.9%、欧米人では3-4%、疑わしいものも入れるとその頻度は4-5%と出生児の双胎頻度よりはるかに高いものとなる。今後さらに多くの機関で一定の基準をもうけて妊娠初期の双胎頻度の調査が実施されることを期待したい。

参考文献

Landy, H.J. et al. (1982): Acta
Gent Med Gemellol 31: 179-194.

Landy, H.J. et al. (1986): Am J
Obstet Gynecol 155: 14-19.

中村 泉 ほか(1987): 医学と生物学
115: 103-107



東大付属学校と双生児研究

永井 好弘 (東大付属学校)

東大付属学校は創立当初の昭和23年より双生児についての研究を続けて来ました。毎年男女あわせて約20組、計40名の双生児を募集しだしたのは昭和28年からです。したがって、現代までにおよそ700組ぐらいの双生児が本校に入学したことになります(表1)。その目的は基本的には双生児を通して「遺伝と環境」についての調査研究をし、それを一般教育に役立てようという考え方です。遺伝的には同じような素質を持つ2人の生長の過程で表れる差は環境の差に基づくものと考えられるので、これはどのような原因によるのかなどを追求することによって教育の望ましいあり方の資料を得ようというものです。

昭和26年には教育学部、医学部、文学部と本校との合同で「双生児研究会」がつくられて、研究が積極的に進められました⁽¹⁾。

教育学部では科研費の援助を受けながら「双生児による人格の発達に関する総合的研究」をはじめ、いくつかの研究がつぎつぎとなされ、それらが「双生児による人格形成Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」(教育心理学研究)となってまとめられています。付属学校でも双生児の運動能力とか生理学上の差異とか、教科面の研究あるいは級風に及ぼす影響などの研究が10数年間続いて、附属論集に成果が発表されています。医学部関係でも双生児研究の成果が何冊かにまとめられて

いるようです。その後、昭和45年頃から入試の成績を追跡することから学校内にケース・スタディ・グループ(C・S・G)という有志の研究グループが、双生児のことも研究しだし、双生児の各対の入試とその後の成績を追跡しながらどんなところに差がでてくるのか、或は差が縮まったりするのはどんな原因が考えられるかなどを探ろうとしたわけです。それらの一部が昭和53年「双生児」(NHK出版)という本にまとめられています。

このグループが発展して現代は双生児研究委員会(T・S・C)がつくられ、学力変動を追跡しながら学力を変化させる要因は一体なんなのかとか、それらと性格との関係はどうかを探っております。しかし、現代のところ今ひとつはっきりとこれであるという結論らしきものが得られず迷っているところです。どなたか良いヒントなどあれば御教示頂きたいと思っています。

天羽さんがいつか何かで御指摘になったように、中学生・高校生段階になると自我意識も目覚め、個体差がはっきりしてしまい、研究内容によっては、研究対象として遅すぎるような感じがしています。ですから生育歴などの調査を手がかりに小学校時代や、それ以前に遡って調査をしなければと思って努力をしているところです。

このような本校の双生児研究も全

校的な規模にはなり難く、教官の中には「双生児研究」という看板を降ろして、もっと別な看板を出して研究したらどうかというような意見も出ています。したがって、毎年入学時に医学部の先生にお願いして行っている双生児の卵性診断についても、教育学研究では卵性をそれほど重要視する必要があるのかどうかということで、その必要性を疑問視する声もあります⁽²⁾。

また、双生児研究において、遺伝が教育の場で規定力をもつという研

究の方向に疑問が出され、それらの研究の結果をどう生かすか、あるいはその結果の社会的影響も考慮されねばならないのではないかなどという問題点も指摘されています。

これらの双生児研究の詳しいことは、五月に出される東大附属創立40周年記念論集特別号にのる予定ですので興味のおありの方はそちらの方をお読み下さい。

以上が大雑把な本校の双生児研究の取り組と問題点などです。

表1 東京大学附属学校双生児入学者

年度	一卵性	二卵性		計	年度	一卵性	二卵性		計
		同性	異性				同性	異性	
1948	3	0	0	3	1968	17	0	0	17
1949	5	0	0	5	1969	10	3	1	14
1950	4	0	0	4	1970	11	2	1	14
1951	4	0	0	4	1971	17	0	0	17
1952	4	2	2	8	1972	16	3	3	22
1953	13	5	2	20	1973	16	5	0	21
1954	16	4	1	21	1974	16	1	2	19
1955	14	6	2	22	1975	14	1	3	18
1956	18	2	1	21	1976	15	4	1	20
1957	8	3	2	13	1977	17	1	1	19
1958	18	2	1	21	1978	13	2	1	16
1959	18	2	1	21	1979	15	2	0	17
1960	18	1	1	20	1980	9	2	1	12
1961	18	2	1	21	1981	14	0	6	20
1962	19	2	1	22	1982	13	0	1	14
1963	15	3	2	20	1983	16	0	1	17
1964	17	1	0	18	1984	16	0	0	16
1965	14	4	1	19	1985	18	0	0	18
1966	18	1	3	22					
1967	15	4	0	19	計	522	70	43	635

(注1) 「東京大学双生児研究会」が発足したのは昭和24年、文部省科学研究費を受けて「双生児研究班」が組織されたのは昭和26年である。

(注2) 永井先生の「東大附属学校と双生児研究」について、特に双生児研究は遺伝学の研究ではないかとの問題点が指摘されていることに関して、ニュースレター編集委員長より意見を求められました。私は双生児研究は遺伝学だけでなく、環境学にとっても大切な研究方法であると考えていますが、かつて私の書いた小論の一部を掲載させていただき、私のコメントに代えたいと思います。(なお、引用文中のアンダーラインは新しくつけたものです)

東京大学附属学校には、昭和23年(1948年)から双生児学級が開設されている。最近では毎年20組、40人以内の双生児と、約80人の非双生児(一般児といわれている)が入学し、中・高の一貫教育のもとに、医学的、教育学的研究に協力している。このような双生児学級は、おそらく世界的に唯一のものであろう。

このふたご学級を対象にした主に医学的分野でなされた研究報告は、『双生児の研究』I

(内村編、1954)、II(内村編、1956)、III(藤田編、1962)に収められている。またその後の研究報告は『双生児研究班業績集』II~V(東京大学脳研究施

設所蔵)に載せられている。

『双生児の研究』第I集の序において、内村祐之氏は1941年以降、双生児とともに集団生活を送り、性格的研究を行ったと自分の体験を述べているが、そのあとに下記のように記している。

『(前略)今これらの文献をかえりみ、また自らの研究を回顧すると、執近30年の間に、”素質と環境”の役わりと、その交互作用つき、かつては想像をされなかったような知見が加えられてきていることを知っておどろくのである。ことに一卵性双生児相互の間に見られる差異の分析から、いかなる環境が、いかなる影響を与えるかという微細な点までが問題にされるようになり、この点について解明された点もすくなくない。このような推移のあとを見ると、双生児研究は、単に遺伝学の貴重な研究方法であるばかりでなく、実に教育や保健をふくめたあらゆる環境学にとり、欠くべからざる研究方法であることを知るのである。将来の環境学が確固たる実証性を得るためには、双生児研究の成果にまつところ甚大なるべきを信ずるものである。

(後略)』と、ここに述べられたことは、さらに30年を経た今日でも、十分に通用する卓見であることは言をまたない。

(浅香昭雄、現代のエスプリ、No.207「遺伝と環境」より引用)

㊦ 双生児研究会第2回総会議事録 ㊦

昭和63年1月9日（土）於山上会館大会議室

I. 報告事項

1. 第2回学術講演会参加者は43名であった。現在会員数は71名である。
新入会員は別記のとおりである。（ニュースター第2号掲載以降分）
2. 昭和62年度には2回の幹事会が開催された。
3. 昭和62年度会計報告（別記）および同監査報告がなされ承認された。
4. 昭和62年度にはニュースターが2回発行された。
5. 第6回国際ふたご研究会議の開催場所、日時などが報告された。

II. 協議事項

1. 第3回大会の世話役として松井一郎氏が推薦された。
2. 開催場所、日時は64年1月14日（土）、東京医大が有力であるが、決定は幹事に一任された。

昭和62年度会計報告（S61.11.11-S62.12.31）

収入の部	支出の部
会費 184,500	通信費 39,930
普通会員	事務費 24,770
62年度 ¥3,000×54名=162,000	別刷代（雑誌遺伝） 10,500
63年度 ¥3,000×6名=18,000	第1回大会補助 21,240
学生会員	謝礼 12,050
62年度 ¥1,500×3名=4,500	会議費 2,600
寄付 31,300	次年度繰越金 104,788
預金利息 78	
合計 215,878	合計 215,878

新入会員（ニュースター第2号掲載以降分）

--- 幹事会議事録 ---

昭和63年第1回双生児研究会幹事会議事録

昭和63年1月9日(土) 11:00-12:30 東京大学山上会館会議室

<出席者> 浅香昭雄、今泉洋子、吉田啓治、松井一郎、天羽幸子、野中浩一、
岡島道夫、早川和生、中田稔、森本兼重、大木秀一

以下の事項が報告、協議された。

1. 1月8日に岡島幹事に会計の監査を受けた。
2. ニュースレターの件を中心に幹事会を3月中に開催したい旨、今泉幹事より申し出があった。
3. 次期大会会長には松井一郎氏が推された。

昭和63年第2回双生児研究会幹事会議事録

昭和63年3月22日(火) 18:00-21:00 東京大学医学部保健学科3号館

<出席者> 浅香昭雄、今泉洋子、吉田啓治、松井一郎、天羽幸子、野中浩一、
大木秀一

以下の事項が協議、決定された。

1. 第3回学術講演会の開催日・開催場所について
昭和64年1月14日(土)午後1時より東京医大講堂その他が候補にあげられた。
2. 第2回学術講演会の反省が行われ、演題数、発表時間、諸係の分担者を決めておくこと等の検討がなされた。また、予備のスライドを常備することが確認された。特別講演の演者についても討議がなされた。
3. ニュースレター第3号の内容の執筆者と分担が決められた。
4. 今後のニュースレターの編集方針について話し合い、投稿や記事の募集を行うということで意見が一致した。双生児研究会専用の封筒の件で意見の交換があった。

【書評】

天羽幸子著「ふたごの世界－双生児の25年間の追跡研究－」
ブレーン出版、1988年

本書は刊行当初からいくつもの新聞で紹介された好著である。著者の天羽さんは心理学を学び、東大附属学校で双生児の研究を続けているうちに、ご自身がふたごの母親になったという稀な体験をもつ方である。研究者の目と母親の目で、25年間にわたる双生児の発達過程と相互の関係の変化が本書には興味深く述べられている。天羽夫人はまた会員数2千人に達するツインマザースクラブの主宰者で、本書の中にはふたごの母親を通して得られた資料、ふたご自身から得られた資料も豊富に含まれている。

一卵性双生児に接した人の大部分はその類似性に驚く。しかし接触する機会が増え、かかわり方が深くなると二人の間の違っている点が目についてくる。似ている、似ていないといつても心の特徴は、身長などのように物理的に測定できるものではなく、観察する人の心の中にある尺度の性質によって大幅に違ってくる。母親の目はふたごの細やかな相違に気がつくようになり、ふたごたちの共通の友人は、本書にもあるようにふたりのイメージが似ていると表現している。

天羽さんは一卵性のふたごはそっくりだという従来からの主張に疑念をもち、ふたりが一緒にいるからこそ生じる違いを解明しようとした。

そして2人に対する親の微妙な態度の相違、きょうだいの役割を習得することによる影響、リーダーとそれに従うものの違いに基づく性格差に注目して研究を重ねた。親がきょうだいの差異をつくるしつけはしていなくても、まわりの人が「どっちがお兄さん」などと質問することがある。このようなことが本人たちの心に影響を与えている事実も指摘されている。ふたりの間のお乳の飲み方の差、感受性にみられる差、日常生活の几帳面さの程度の差など丁寧に行き届いた観察がなされている。ふたりの身体発達のリズムと力関係の対応に関する事、ふたりがともに反抗的になることはないこと、言葉の発達に特色があること、ひとがそれぞれ固有にもっている根本気分や、活動性の強さにかんがりの類似性が認められることなど、私自身も教えられることが多かった。双生児の相手に対する感情の深さ、双生児意識の強弱を規定する要因に関する資料も貴重である。日本の双生児研究は医学に関する領域の研究に比べて、心理学のそれは少ないのであるが、本書にはこれからの心理学的研究の出発点となる問題もたくさん含まれている。

読み終えて感ずることは著者天羽夫人がやさしい人柄と研究者としての確かな目をもつておられるという

ことである。表紙のとうもろこしを食べている双生児の写真はまことにかわいらしい。穏やかでやさしく、そして叡智にみちた母親に育てられた子どもたちは幸せである。双生児の生い立ちの記録としてだけでなく、子どもを育てるときの着眼的、配慮の仕方、母親としての内省など読者は本書から多くを学ぶであろう。い

ま20代半ばにある双生児たちはやがて生まれた家を離れ、それぞれの生活を始め、また親となる。仕事の上でもこれまでとは違った起伏がある。これからの成長の記録も読みたいものである。

(東京都立大教授・詫摩武俊)

文学作品に登場するふたご

山田一朗(昭和大・医・公衆衛生)

ふたごは、文学作品の中にもしばしば登場し、様々なドラマを形作っている。

新しいところでは、アメリカのB. ウッドとJ. ギースランドの共作による「双生児(TWINS)」という小説がある。主人公のデイビッド&マイケル・ロス兄弟は、ともに頭脳明晰で将来を囑望される医師であった。積極的で非情な兄と繊細で気の優しい弟。全く性格の違うふたりは、お互いの中にいつも「もう一人の自分」を追い求めていた。ある日、このふたりがニューヨークのアパートで、変死体となって発見される。様々な憶測がとびかう中、ショッキングな事実が浮かび上がる…。この作品は1977年に発表され、全米で驚異的なベストセラーとなった。日本でも日夏響による翻訳が早川書房から出

版されている。

古典的なもので有名なのは、何といてもシェークスピアの戯曲「間違いの喜劇(The Comedy of Errors)」であろう。(ちなみにシェークスピア自身、ハムレットとジュディスという異性双生児の子どもをもうけている。)

1594年、作者が30歳の時に初演されたこの作品には、兄・弟ともにアンティフォラスという名のふたごと、これまた兄・弟ともにドロミオという名の2組のふたごが登場する。「名前でも変えなければ区別できない」ほどにそっくりなふたごが、同じ名前が出て来るところが間違いのもととなる。アンティフォラス兄弟は、シラクーサの貿易商イーゾンの子として生まれた。ドロミオ兄弟は、アンティフォラス兄弟の召使

いとなるべく育てられていた。ところがある時彼らの乗った船が難破し、命は助かったもののそれぞれの兄・弟のペアが父・母ともども離ればなれになってしまう。父のもとで成人した弟のアンティフォラスとドロミオは、長い旅の末に兄のアンティフォラスとドロミオの住むエフェサスという町にやってきた。

混乱はここから始まる。兄のアンティフォラスは自分の召使いに命じたつもりで弟のドロミオに命令し、兄のドロミオは弟のアンティフォラスとも知らずにその指示を仰ぎ、しまいには兄嫁の妹が弟のドロミオにくどかれて姉婿が狂ったと仰天し．．．と大騒ぎが続いた後に、晴

れて父・母・2組のふたごが皆めぐり合えるという大団円で幕を閉じる。

この物語の原典は、古代ローマの作家プラウトゥスの喜劇「メナエクス兄弟」であるという。ただしこちらに登場するふたごは1組だけである。シェークスピアは、原典にもみられる「混乱」の量を増し質を深めることで、「人違い」をアイデンティティ喪失の危機として描き出すことに成功した。

わが国では先頃「シェイクスピア・シアター」という劇団が、この「間違いの喜劇」を俳優全員が仮面をつけて登場するという奇抜な演出で上演し、話題を呼んだ。



第6回国際ふたご研究会議のご案内

～開催日時と場所の変更について～

本研究会のニュースレターNo. 2で第6回国際ふたご研究会議のお知らせを致しましたが、つい先日、Dr. P. Parisiからふたご研究会議の日時と開催場所の変更についての手紙が届きましたので、下記にご案内致します。なお、詳しくお知りになりたい方は本ニュースレターと一緒に同封の Newsletter of the international society for twin studies (No.17) をご覧下さい。

日時： 1989年8月28日(月) - 31日(木) まで
場所： ローマ市内 Ambasciatori Palace Hotel

第3回学術講演会

開催と演題募集のお知らせ

日時 昭和64年 1月 14日 (土) 午後 1:00 - 5:00

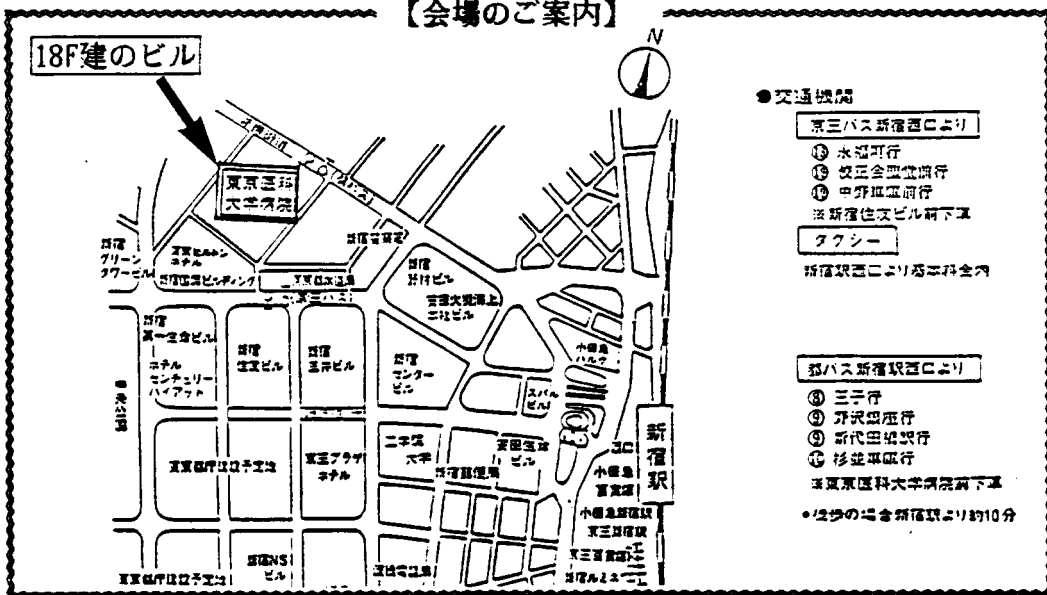
会場 東京医科大学病院・第1研究教育棟・3階：第1講堂 (新宿)
〒160 新宿区新宿6-1-1
なお講演会終了後、病院職員食堂で懇親会を行います。

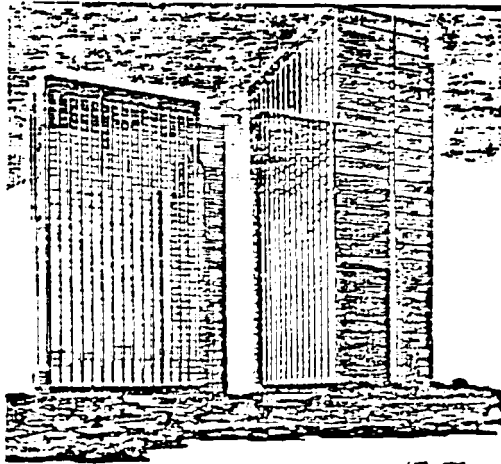
特別講演 「日本のスーパーツイン」
馬場一雄先生 (日本大学総合科学研究所教授)

演題募集 抄録： 演題名、所属、氏名および要旨を、400字程度にまとめて下さい。
締切： 昭和63年11月30日
送付先： 〒154 東京都世田谷区太子堂 3-35-31
国立小児病院・小児医療研究センター
小児生態研究部・松井一郎 あて
電話 03-414-8121 (代)

世話人 国立小児病院・小児医療研究センター 松井一郎

【会場のご案内】





(東京住友ツイン
ビルディング)

(場所：東京都中央区新川)

編集後記

⑤ 吉田啓治先生が、第2回双生児研究会学術講演会の特別講演でご発表になりました「双胎妊娠におけるvanishing twin」について、詳しく解説をしていただきました。この報告によりますと、妊娠初期の双胎頻度は1.6~1.9%と高い頻度が得られています。この値は出産時での頻度に比べますと3倍も高いことになります。妊娠初期にこのように高い双胎頻度であったのが、妊娠経過中に双胎の1児のみが流産した結果、単胎の出産として取り扱われてしまうなどの理由により、出産時での双胎頻度は減少してしまうとのこと、興味深く拝見致しました。これらの結果は超音波診断により得られた、新しい知見によるものです。

(Y. I.)

⑥ 私ごとになりますが、最近、英文の教室3年報を編集し、そのとき、英単語の間違いやら表現統一やらにいつとき頭を悩まされました。くじけそうになったときに思い出したのが、数年前にロンドンで、ふたご頻度の調査をしたときにみた教会の洗礼記録です。時代は現代と異なりますが、母国語の人(教区簿冊記入者)でもきわめて多数の表記のばらつき(大学入試的センスで言えば間違い)がありました。twinsが多いのはもちろんですが、その他にも、twinnis, twines, twyns, twynns, twynnes, twenes, tweens,...といった調子です。教区によっては、gemelliなどと、格調高く書かれているものもありました。(K. N.)

